二〇二二年度入学試験問題

A－2

国語

（一〇〇点　六〇分）

《注意事項》

一、この問題冊子は全部で13ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合申し出ること。

二、解答には**黒鉛筆又はシャープペン**を用い、色鉛筆、万年筆などを使用してはならない。

三、解答用紙は1枚（表と裏）である。

座席番号（数字）、氏名を解答用紙の指定欄に記入すること。

四、この問題冊子の余白は、自由に利用してよい。

五、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお、出題の都合上、文章の一部を省略するなどの改変を施している。）

科学と良心にどのような接点があるのだろうか。良心概念の来歴や多義性については後に紹介するが、科学との関係でいえば、良心は自己や集団に帰せられる責任の認識としてとらえるとき、その特性をもっともよく表現することができるだろう。科学倫理、科学技術の倫理、科学者の倫理など、科学や科学技術の倫理的指針や、それに付随する責任をめぐる議論には、すでに一定の蓄積があるが、良心という概念をもち出すことの積極的意義はどこにあるのか。

一つの意義は、良心をめぐる議論が哲学や宗教など、人文社会系の学問において長い歴史を有しており、それを科学の営みに適用することによって、より幅広い視点から科学を対象化し、現代において問うべき論点がどこにあるのかを明らかにできることにある。もう一つの意義は、道徳的指標（モラル・コンパス）の一つとされてきた良心、および、共感や利他性など、良心の隣接概念に対し、科学の視点から、その起源や機能について説明を与えることによって、良心概念そのものを拡充し、異なる学問分野が互いに交流するための共通のプラットフォームを形成できることにある。

現代の科学技術は、ゲノム編集から核エネルギーの利用に至るまで、個人の人生や地球環境に①甚大な影響をもたらすものが少なくない。[a]、科学技術の使用は社会的なリスクと常に連動しており、そこでは使用者個人の善意や悪意は限定的な役割しか果たさない。[b]、良心を考えるときにも、それを個人の内面に位置づけるだけでなく、良心に起因する責任の認識は社会に対し開かれたものでなければならない。そして、ゲノム編集や核エネルギーの利用に典型的に見られるように、現代科学技術がもたらす影響力の時間的長さを考慮すれば、二一世紀の良心は、未来世代への責任を引き受ける必要がある。それはおのずと人類全体の生存や持続可能性を視野に入れることになるため、これまでの道徳、すなわち、小集団の中で系統発生的に発展してきた道徳の次元にとどまることは許されないのである。

新型コロナウイルス感染症によって引き起こされた状況は、文字通り人類規模の危機となっている。人の善意や悪意は、このような状況下で、どれほどの意味をもつのか。そこで次に、疫病文学の代表作の一つ、アルベール・カミュの『ペスト』

（原著一九四七年）から重要な論点を②チュウシュツし、科学と良心の関係を考察するための手がかりとしたい。

カミュの『ペスト』は、ペスト拡大に伴って③フウサされたアルジェリアのオランという都市を舞台として、ペスト終息によって都市が開放されるまでの間の人びとの精神状況や生活を描いた架空の物語である。そこでは、ペスト④蔓延という緊急事態において人間の心理や社会関係がどのように変化するのか、経済活動が停止したとき、どのような対応がなされるのか、などが具体的かつ緻密に描かれながら、同時に、この世の不条理や、人の苦難や死に対する普遍的な問いが投げかけられている。その作品を読むとき、二〇二〇年初頭以降の世界で起きていることに酷似していることに驚かされると共に、わたしたちのあり様を外部から観察する視点を与えられるかのようでもある。

物語は二〇世紀半ばを想定しており、前世紀と比べるなら、ペストをはじめとする感染症に対する医学的知識や対処方法も格段に増している。［C］、医学が決定的な勝利をおさめることはない。主人公のリウーは医師であり、彼の献身的な治療の様子が作品中で描かれているが、その努力をあざ笑うかのように、蔓延するペストは次々と人の命を奪っていく。物語の中では「自宅への流刑」と呼ばれる外出⑤ジシュク政策が取られているが、それが命を保障してくれるわけではなかった。

圧倒的なペストの力を前に、それを「天罰」として論じるカトリック司祭パヌルーもいれば、できるかぎりの市民救済のために保健隊を結成したタルーもいる。その英雄的ともいえるタルーの善意に対し、この小説における「筆者」と称する人物が、冷静に次のように論評している点は注目に値する。

> 世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するものであり、善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる。人間は邪悪であるよりもむしろ善良であり、そして真実のところ、そのことは問題ではない。しかし、彼らは多少とも無知であり、そしてそれがすなわち美徳あるいは悪徳と呼ばれるところのものなのであって、最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである。殺人者の魂は盲目なのであり、ありうるかぎりの明識なくしては、真の善良さも美しい愛も存在しない（カミュ一九六九、一九三頁）。

第一に、（1）人間の行為を単純に善意と悪意に帰することの問題性が、ここで指摘されている。たとえ善意からなされた決断や行為であったとしても、それが「豊かな知識」を欠いた場合、結果として「悪意と同じくらい多くの被害」をもたらすことがある。悪しき結果を避けるために必要なのは、必ずしも善意ではなく「無知」の認識であり、「ありうるかぎりの明識」である。とりわけ危機的状況にあっては、正確な知識の有無が決定的となる。このことは、主人公リウーが、医学的な知識と経験に基づいて、淡々と職務に当たる理性的かつ実践的な人物として描かれている点にも関係している。

第二に、特定の人間の英雄的なふるまいが、必ずしも問題解決には至らないことが、ここでは示唆されている。端的にいえば、A の否定である。危機的状況においては、英雄的なふるまいをする人、敵との「戦い」を力強く宣言する人に注目が集まり、その人があたかも問題の解決者であるかのように期待されることは、戦争の時代に限らず、これまで何度も繰り返されてきた（新型コロナウイルス感染症への対応に関しても既視感があるかもしれない）。しかし、『ペスト』において描かれている、病人への対応や対策に関わるのは、ごくありふれた人びとであり、その人たちがささやかな形で善良さを行使している。こうした描写と対比的なのが「最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである」という言葉である。強制的な安楽死あるいは自殺幇助すら連想させる言葉であるが、「人を殺す」ことさえ正当化する知識が、科学の名の下に語られた時代があったことについては、後に事例を取りあげる。ここまでの論点から確認できる「良心」の働きを次に整理してみたい。

日本語の日常的な語彙としての「良心」は、前述の「善意」に近い意味で用いられている。「良心」という日本語が英語の“conscience”の訳語として定着したのは一九世紀末のことである。当時、外来語に対応する適切な日本語が見当たらない場合、中国の古典から言葉を探すことが多かった。「良心」は『孟子』（告子章）から取られたことからもわかるように、儒教的な性善説の系譜の中で理解される傾向が強かった。

文献的に確認される「良心」の初出はブリッジマン・カルバートソン訳『新約聖書』（一八六三年）といわれている。福沢諭吉は『学問のすすめ』（一八七二～七六年）の中で“conscience”を「至誠の本心」と訳しており、当時、複数の訳語候補があったことがうかがえる。

[d]、英語の“conscience”にはギリシア思想に由来する長い系譜があり、西洋概念としての良心の語源的な意味は「共に知る」である。“conscience”の元になったのは、ラテン語の“conscientia（コンスキエンティア）”であり、“con（共に）”と“scire（知る）”から成り立っている。さらにコンスキエンティアの元になったのはギリシア語のシュネイデーシスであり、やはり「共に」と「知る」から構成されている。もちろん、言葉の意味は語源だけで特定することはできず、それぞれの時代で多様な意味解釈が展開されていったことはいうまでもない。しかし、科学と良心との関係を考えるうえでは、儒教的なニュアンスに還元されない西洋史における良心の来歴を知っておくことは重要である。

たとえば、日本人としてはじめて大学の学位（バチェラー・オブ・サイエンス）を取得した新島襄（一八四三～九〇）は、米国滞在中に“conscience”と出会い、帰国後、「良心」という言葉を使うことになるが、その際にも、儒教的な「良心」と混同されないよう注意を払っていた。新島の場合、良心は儒教ではなく、キリスト教や自由の概念に、より強いつながりをもっていた。

西洋語の「良心」には語源のレベルでは「良い」「悪い」という価値判断が入っていない。それゆえ、セネカは「善い良心」「悪い良心（良心のやましさ）」という表現を使うことができたし、その用語法は今も西洋語の「良心」に引き継がれている。カミュの『ペスト』における先の議論との関係でいうと、「知る」（スキエンティア）ことは、自らの「無知」の認識と表裏一体であり、「無知」であればこそ、「共に」知る（コンスキエンティア）ことを志向することになる。そして、善意や悪意とは独立した「[B]」が目標とされるのである。

「科学」という日本語は、一八八〇年代初頭、西周が“science”に与えた訳語であるが、サイエンスはラテン語のスキエンティアに由来している。西は、当時日本に流れ込んできた西洋の諸学（discipline）が、非常に専門分化していることに新鮮な驚きを感じ、“science”に「分科の学」（ばらばらに分かれている学問）という訳語を与えた。これは確かに当時の“science”の形式的側面をとらえているが、それがスキエンティア（知ること）に由来するというニュアンスは日本語の「科学」からは理解することができない。“con-science（良心）”は「共に知る」ことであり、言葉の本来の意味で「共にサイエンスすること」であるとすれば、少なくとも語義レベルでは、科学と良心が密接な関係にあることがわかるだろう。自らの

行為を安易に正当化することなく、また、英雄的に善意を強弁することなく、理性的かつ実践的に共通の「知」に開かれていくことに、コンスキエンティアの働きを見出すことができるのである。では、歴史的な出来事の中で、科学と良心はどのような関係をもっていたのだろうか。

善意でなされたとしても、結果として「悪意と同じくらい多くの被害」が生じることがある。これは「良心のパラドクス」や「誤れる良心」といわれることがあるが、(2)「よかれ」と思ってやったことが、後に大きな「悪」として認識されることは枚挙にいとまがない。人類が引き起こした悪や暴力の問題を、文明論の中で論じたアルベルト・シュヴァイツァー（一八七五～一九六五）は、次のように良心について述べている。「断じて鈍感にされてはならない。われわれが〔倫理的〕葛藤をいよいよ深く体験するならば、われわれは真理のなかにある。疚（やま）しくない良心などは、悪魔の発明である」（シュヴァイツァー一九五七）。

「科学者の良心」も決して例外ではなく、「悪魔の発明」とでもいいたくなるような非人道的な実験や技術開発が行われてきた。原爆の開発（マンハッタン計画）においては、日本との戦争を早期に終わらせ、これ以上の戦死者を出さないため、という大義名分が掲げられ、末端の科学者や技術者たちは詳細を知らされることなく、⑥未曾有の国家プロジェクトに組み込まれた。医学の発展のために人体実験が正当化された時代があった。また、国家や社会の繁栄を名目とする優生政策は、最先端科学（優生学）の社会への適応として広範囲に行われ、障がい者の強制不妊手術が各国で行われた。同様のことが、日本では旧優生保護法（一九四八～九六年）のもとで戦後も継続され、その問題の深刻さが、被害者の口を通じて国民に知られるようになったのは、ごく最近のことである。

科学者がその良心に基づいて実験や研究などを行ったとしても、そのすべてが許されるわけではないことを、過去の事実は教訓として教えてくれる。そこで問題となっているのは、善意があったのか、悪意があったのか、ということではない。自分では善きことをなしていると考える人の手によって悪がなされることがある。こうした事態を洞察し、問題が深刻化することを未然に防ぐために、良心は単に個人の内面にとどまるものであってはならない。「共に知る」範囲を適切に拡大し、「悪魔の発明」としての「疚しくない良心」に依存するのではなく、倫理的に葛藤する良心を働かせるためには良心の社会

的次元（社会的良心）が欠かせない。

「共に知る」範囲を狭く設定することによって、科学はその専門性を増すことができる。しかし同時に、自らに都合よく「共に知る」範囲を限定することにより陥る陥穽についても歴史的教訓から批判的に学び、(3)社会的良心の維持・活性化に努める必要があるだろう。

〈『良心から科学を考える』所収　小原克博「科学と良心の接点」に拠る〉

問一　二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二　a ～ d に入る言葉として適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他方　　イ　したがって　　ウ　決して　　エ　つまり　　オ　とはいえ

問三　A に入る適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ヒューマニズム　　イ　ヒロイズム　　ウ　ポピュリズム　　エ　ニヒリズム

問四　B に入る適切な語句を、これ以前の本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問五　傍線部(1)「人間の行為を単純に善意と悪意に帰することの問題性」について、「人間の行為を単純に善意と悪意に帰すること」がなぜ問題なのか、本文を踏まえて七〇字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

問六　傍線部（2）について、「「よかれ」と思ってやったことが、後に大きな「悪」として認識され」た例を本文中より三つ挙げなさい。なお、三つとも「「よかれ」と思っ」たというその目的も必ず書くこと。

問七　傍線部（3）について、以下の二つの問いに答えなさい。

Ⅰ　ここで筆者がいっている「社会的良心」と対照的な良心とはどのような良心か。本文の言葉を用いて十五字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

Ⅱ　筆者が理想としている「社会的良心の維持・活性化」とは、どのような科学者の姿勢を指すか。本文を踏まえ、十五字以内（句読点を含む）で二つ挙げなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお、出題の都合上、小見出しを省略し、文章の一部を改変している。）

爛漫と花をつけた桜並木の下を自転車で走っていく。(a)つがいの鴨は川面を①スべるように進み、白鷺が中洲に舞い降りる。去年と変わらない春の光景。ただ違うのは、土手にシートを広げて②憩う花見客の姿がないことだ。花や鳥たちにとっては変わらぬ春。人にとっては不穏な春。どこまでも続く花の下を走り抜けながら、それぞれの生物が生きている環世界の違いをあらためて思う。同じ時空間を共有していながら、棲んでいる世界は異なっている。

でもいま、私たちが恐れているのは異なる環世界の間を往き来するものだ。動物から人へ、人から人へ。生物の間を往き来し、感染し、影響を及ぼすもの。

かつてレヴィ＝ストロースは狂牛病（牛海綿状脳症：ＢＳＥ）について、人間が作りだした共食い（カニバリズム）の帰結として論じた。ウシの死骸の一部を飼料に混ぜて家畜に食べさせたことがこの病の蔓延を招き、病んだウシの肉を食べることで人間も死の危険に晒される。彼が指摘したのは、ウシがウシを食うことだけではなく、人がウシを食べることもまた、動物同士の共食いという一種のカニバリズムにほかならないということだった。そこには「食べる」という抜き差しならない関係を通して他の存在とつながりあい、相手の一部を自己の中に摂り入れ、それによって危機的な影響を被ってしまうという、つながりと同化の負の側面が示されている。

だが、あえてカニバリズムというまでもなく、(1)私たちは常にそうした危うさをはらんだ自他のつながりと融合を生きているのかもしれない。無数の物質を摂りこむことで「私」が形成されると同時に、「私」から出ていく物質には私の一部が含まれている。そのようにして、私は無数の他からなるとともに、無数の他の中に拡散している。自己でもあり他でもある物質（サブスタンス）は、そうしていくつもの環世界の間をめぐり流れる。

食べること、触れあうこと、世話すること、分かちあうこと。そうした日常的な行為を通して、私と人間ならざるものを含む他者たちの断片は延々と受け渡しされ、摂取され、放出され、拡散し、循環していく。

南アジアの村で、あるいはメラネシアの島で、人類学者たちはそうした相互浸透的で拡散的な「人」のありように出会ってきた。水や食物、血液や母乳、供物や贈り物。それらの内に含まれ、やりとりを通して人びとの間を受け渡されていくものを、人類学者は「サブスタンス＝コード」と呼んだ。それは物質としてのサブスタンスと、人のありようを方向づけ、自己と他者、人間と自然の関係を秩序づける規（のり）との一体性をあらわす概念である。人類学的な議論において、このように他者のサブスタンス＝コードを摂りこむことで生成するとともに変容し、自己の一部を放出することでつながりの中に拡散してゆくような人のあり方は、明確な境界をもち、それ以上分けられない存在としての「【A】」と対比されるべき「【B】」と呼ばれ、一部の非西洋社会における独特な人間像を表すものとされてきた。

ところで、生物学者の中屋敷均によれば、ウイルスなるものは一般に、キャプシドというタンパク質の集合体が、固有の遺伝情報からなる核酸を包みこむという基本構造をもつという。中屋敷はまた、親から子へという(b)鉛直方向における遺伝子の伝達とは異なり、同時代に存在する他種の生物の間で遺伝子がやりとりされるという、遺伝子の「水平移行」を媒介するウイルスの働きについて述べている。たとえば、ある宿主の遺伝子をウイルスが運び出して別の宿主に感染することで、前者の遺伝情報が後者に移行することがありうる。

コード化された情報を内包し、宿主の間を水平方向に移動していく物質。とすれば(2)ウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンス＝コード」だといえるかもしれない。

ただしもちろん、それは人類学者によって長らく議論されてきたサブスタンス＝コードと同じではない。人類学的な議論において、「コード」という語は符号化された情報というよりも人としての規を意味しており、ゆえに人類学的なサブスタンス＝コードの概念には、社会関係や価値観やモラルなどが含意されている。他方で、ウイルスに含まれるコードは本来的に、社会的なものでも倫理的なものでもない。

その一方で、ウイルスを含む生物学的なサブスタンス＝コードの流通は、社会化されることがありうる。たとえば、あるウイルスの感染経路をたどろうとするとき、それはウイルスが伝播していく宿主と宿主の関係性をたどり、明らかにしていくことにほかならない。そのつながりは次々に枝分かれし、伸展し、拡散していく。このとき、宿主である「私」の微小な

断片が接触を通して社会関係の③アミの目の中に分散していくとともに、無数の他者たちの断片が知らぬ間に「私」の中に混入していることが、想像でも比喩でもなく、端的な事実として知らしめられる。

そうして気づかされるのは、透過的で拡散的な「【C】」としての人が、遠い異文化に生きる人びとの想像の産物であるのではなく、確固たる境界をもち、これ以上分けることができない存在としての「【D】」こそが、たぶん幻想なのだということだ。

サブスタンス＝コードや「【E】」などの概念を提唱した人類学者たちは、南アジア社会において、危険をはらんだ「他者」との接触や物のやりとりがもたらすかもしれない影響から自分の身を守るために、人びとが編みだした規範やふるまいの例を報告している。

相手と触れあわない、共食しない、同じ食器を使わない。あるいはまた、相手と適切な距離をとり、互いの間に一時的な境界を引く。

他者との接触は潜在的な④畏れをはらみ、接触にともなうサブスタンス＝コードのやりとりには常に危険が潜んでいる。そして、そうした危険を回避するためにつながりを断ち切ろうとする方法は、いつもどこか似通っている。

遺伝情報からなる核酸を包みこんだタンパク質の集合体。そんな生物学的なサブスタンス＝コードは本来的に、人間的なものでも社会的なものでもない。だが、それが社会関係を通して伝播し、拡散し、それを受け渡しする人びとの生に重大な影響を及ぼすとき、人類学者の見出したサブスタンス＝コードの場合と同じく、その流通を制御し、やりとりをコントロールするための方法が編みだされる。

ただし今や、そのために用いられるのは洗練されたテクノロジーだ。スマートフォンの位置情報や検索履歴の統計データを用いたクラスター発生エリアの推定、携帯電話やＩＣカードのデータを用いた感染者の移動経路の特定、スマートフォンのアプリを用いた利用者同士の接触の記録と感染者との接触の通知。

これらのことを可能にしているのは、普段はさほど意識されることもないスマートで便利な情報ネットワークだ。ウイルスという生物学的なサブスタンス＝コードの流通を把握し、制御するために（c）インフラ化した情報のネットワークが用

いられ、それを補完するために新たな技術が開発されていく。人びとの移動経路が追跡され、互いの接触が記録され、感染の軌跡が可視化される。そうやって部分的にせよ露わにされるのは、皮肉にも「個人情報」という名で呼ばれる私たちの痕跡、私たちの断片、私たちのつながりと混交と拡散のありさまである。

たぶん【F】など、これまでに一度も存在したことはなかったのだ。

だが、人間によるそうした把握や制御の試みをよそに、ウイルスは人と人の間を、異なる環世界に生きる生物たちの間をめぐり流れる。そのことが可能であるのは、まずもって異なる存在である〈私-たち〉の間に、少なくとも⑤授受の関係が成り立つような共通項があるからだ。くわえて、ウイルスの⑥ジンソクな流通と広範な拡散を可能としているのは、人間の作りだした社会的ネットワークの存在にほかならない。

だからこそいま、人間性や社会性とは本来的に無関係なサブスタンス＝コードとして、異なる存在の間をめぐり流れるウイルスの流通を見つめる視座と、そうした流通がどのようなネットワークによって媒介されており、それに対処するためにいかなる社会的・政治的な方法が編みだされ、テクノロジーとして実装され、普及することで社会の常態を変えていくのかを注視する視座の両方が必要であると思われる。生物学的なサブスタンス＝コードの流通と、社会的かつ政治的なネットワークのもつれあいを見定めるために。

〈『コロナ後の世界を生きる――私たちの提言』所収　石井美保「センザンコウの警告」に拠る〉

問一　二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二　傍線部（a）～（c）の本文中の言葉の意味として正しいものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

（a）「つがいの」

ア　淋しそうな　　イ　組となった二羽の　　ウ　自由に生きる　　エ　寄る辺ない様子の

(b)「鉛直方向」

ア　上から下への垂直方向　　イ　血のつながりを有した方向

ウ　互いに融合する方向　　エ　決して混ざり合うことのない方向

(c)「インフラ化した」

ア　価値の上昇が常態化した　　イ　扱いやすいようにコード化された

ウ　社会に多大な影響力を持つようになった　　エ　社会生活の基盤となった

問三　傍線部(1)「自他のつながりと融合」を可能とする「人」の有り様を端的に示す言葉を本文中より2つ、それぞれ三文字と五文字で抜き出しなさい。

問四　【A】〜【F】には、❶「個人(individual)」か❷「分人(dividual person)」のいずれかの言葉が入る。それぞれに当てはまる組み合わせとして適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　【A】＝❶　【B】＝❷　【C】＝❶　【D】＝❷　【E】＝❶　【F】＝❷

イ　【A】＝❷　【B】＝❶　【C】＝❶　【D】＝❷　【E】＝❷　【F】＝❶

ウ　【A】＝❶　【B】＝❷　【C】＝❷　【D】＝❶　【E】＝❶　【F】＝❷

エ　【A】＝❷　【B】＝❶　【C】＝❷　【D】＝❶　【E】＝❶　【F】＝❶

オ　【A】＝❶　【B】＝❷　【C】＝❷　【D】＝❶　【E】＝❷　【F】＝❶

カ　【A】＝❷　【B】＝❶　【C】＝❶　【D】＝❷　【E】＝❷　【F】＝❷

問五　傍線部（2）について、以下の二つの問いに答えなさい。

Ⅰ　「ウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンス＝コード」だといえるかもしれない」と筆者が考えた理由を、ウイルスとサブスタンス＝コードそれぞれの特徴を踏まえて一〇〇字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

Ⅱ　ここで筆者が「文字通りの」と述べたのは、ウイルスとサブスタンス＝コードのどのような違いを踏まえたからか。五〇字以内（句読点を含む）で説明しなさい。